



具体的な場面の想定がポイント

インクルーシブ教育研究者・博士（障害科学）野口晃菜

今回のでこぼこポン!のテーマは「声の大きさ調節の発明品」です。

電車の中や図書館、授業中など、小さい声で話さなければならない場面で大きな声で話してしまい、周りの人に何度も注意をされる子がいます。また、逆に発表場面やざわざわしている場面で、声が小さすぎて聞こえない子もいます。

「声の大きさ」は目に見ることができないため、どのくらいの大きさが適切か、とても分かりづらいものです。特に学ばなくても、なんとなく「こういう場面ではこういう大きさ」ということがわかり、実際の場面で適切な声の大きさを話せる子もいれば、それが難しい子もいるのです。また、自分なりにその場で適切な声の大きさを話しているつもりなのに、毎回注意をされてしまうと、話すこと自体が怖くなってしまいうこともあります。

でこりんは場面に応じて声の大きさを調節することが難しいため、様々な場面での声の大きさを調節することを練習できる「こえシアター」を発明して実際に声を出すことで、どのような場面ではどのくらいの大きさが良いかを確認しています。

もし場面ごとに適切な声の大きさを話す子どもがいたら、同じように、実際の日常生活の場面（電車の中、テスト中、話し合い場面、発表の場面など）を想定して、それぞれの場面でどのくらいの大きさの声で話すのかを練習してみるのも良いでしょう。その際は、でこりんのように、その子自身が実際に声を出して確かめてみるのが大切です。ゲーム感覚で「テスト中!」「話し合い!」「発表!」などと瞬発的に声の大きさを変える遊びをするのも楽しく学べます。

また、実際の場面においても適切な声の大きさを話せるように、例えば図書館に入る直前に「どのくらいの声の大きさを話す?」と実際の声の大きさを確認した上で図書館に入るのもおすすめです。特に新しい場所に行くときや、新しい場面においてはこのように事前に確認することが有効です。

日常生活の中で、適切な声の大きさを話している時の方に着目をして、「今の声の大きさちょうどいいね」とフィードバックをしましょう。できていない場面ではなく、できている場面の方に着目をして、ポジティブにフィードバックをすることで、話すこと自体が怖くなってしまいうことや自信がなくなってしまうことを防ぐことができます。

はじめから完璧を目指すのではなく、まずはできそうな場面からチャレンジしてみましょう。